

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：37105

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370037

研究課題名(和文) ヴァルター・ベンヤミンとドイツ歴史哲学の総合的研究

研究課題名(英文) Walter Benjamin's Philosophy of History and its connection to the subject in German

研究代表者

森田 團 (Morita, Dan)

西南学院大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：40554449

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：歴史哲学は近代における自己理解の根本的形式である。本研究は、このような洞察に基づいて、ベンヤミンの歴史哲学を解明することを試みた。その成果は、ベンヤミンがこの自己理解を言語とイメージの解明を通して遂行しようとしたこと、その際、歴史とはこの自己理解の試みそのものにおいて表現されること、この表現においてベンヤミンのメシアニズム的思考が理解されねばならないことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The philosophy of history in the early 20th century in Germany is defined as an attempt at self-understanding. In that sense, the philosophy of history provides us with the fundamental form of self-understanding. From that perspective, this study tries to comprehend Walter Benjamin's philosophy of history. Benjamin's thought is characterized by his pursuit of the state of the self through the analysis of the experience of language and imagery. The act of translation, for example, is nothing but a form of expression, in which self-understanding is accomplished by confronting a foreign language. In "The Arcades Project", he tries to detect the unconscious hopes embraced by the masses, which are expressed in cultural productions. It is the concept of "dialectic image" that makes the expression of those hopes possible. Thus the concept of history is unthinkable without executing an act of expression. Benjamin's messianism needs to be interpreted on the basis of the concept of expression.

研究分野：哲学

 キーワード：歴史哲学 言語哲学 イメージ 終末論 ライプニッツ エルンスト・ブロッホ ヤーコブ・タウベス  
 フランツ・オーファーベック

## 1. 研究開始当初の背景

『ベンヤミン 媒質の哲学』(水声社、2011年)において、本研究代表者は、ヴァルター・ベンヤミン(1892-1940)の哲学を、「媒質 Medium」の概念を手掛かりに、とりわけカッシーラーとクラークスの哲学の比較を通じて、その言語哲学とイメージの哲学、ならびに両者の連関から構成されるものとして描き出した。もちろん、ベンヤミンの哲学は、言語哲学とイメージの哲学に尽きるものではなく、その本質においてやはり歴史哲学である。同書の結論部において歴史哲学へ向かうベンヤミンの思考が、いかに彼独自の言語哲学とイメージの哲学に基づいていることを示唆したのは、今後の研究の方向性を示すためであった。本研究は、この方向性をより包括的な視座のうちで具体化する計画として構想された。

そのためには当時さまざまな哲学者たちによって企てられた歴史哲学という試みが、いったい何であったのかという問いが必要不可欠である。近代の歴史哲学は、自らの行く末と来歴、すなわち過去と未来を問うことによって現在の位置を測定する試み、すなわち自己理解の試みにほかならない。いわば歴史哲学とは近代における自己理解の根本形式なのである。言うまでもなく、この自己理解は自らを歴史の実存として自覚することと切り離せないが、1930年代から40年代に展開されたベンヤミンの思考は、まさに自ら実存を賭して行われた。ベンヤミンは切迫した歴史的状况のうちでどのような歴史哲学を構想したのだろうか。このような関心が研究開始当初の背景となった。

## 2. 研究の目的

本研究は、以上のような問題関心のもとに、具体的には以下の三つの観点、すなわち、(1)ベンヤミンの言語哲学と歴史哲学の関係、(2)ベンヤミンの歴史哲学と同時代の歴史哲学の関係、(3)ベンヤミンの歴史哲学と近代の歴史的思考との関係という三つの観点からベンヤミンの歴史哲学を考察した。研究期間内に目指したのは、この三つの関係の解明を通じて、ベンヤミンによっていかに歴史の実存が言語論的に改変されて解釈されたのか、そして逆に歴史の実存の根源をベンヤミンが独自の観点からいかに捉えたのかを明らかにすることである。

この総合的な歴史哲学的思考の解明を通して、本研究はまた、近代における自己への問いが、その来歴と行く末、すなわち自らの

過去と未来を問うことと切り離せず、それゆえに根本的に歴史の実存への問いであるということの意味を明らかにしたうえで、私たちがいま直面している実存の危機を踏まえ、その未来への問いの可能性を改めて検討し、最終的にはこの問いを新たに準備せんとした。

## 3. 研究の方法

研究計画を円滑に実施するために、上記の三つの課題をさらに複数の課題に分けて、実行した。それぞれ課題を基本的に一年から一年半ごとに実施されるべき研究とし、そのテーマのもと複数の研究会を研究協力者とともに主催し、発表を行うことで、研究を遂行していくこととなった。

また可能である場合は、大学院の演習・講義などにおいて各課題を取り上げることによって、集中的に研究を推進することができた。以上のような手続きによって研究を行うなか、進捗が思わしくないテーマについて別テーマに代え、研究が進んだテーマについてはさらに掘り下げるなどの方途を取り、研究の重点化を図ることで計画実施の充実をはかった。その結果、上述の三点について以下に述べる内容の研究を行った。

(1)ベンヤミンの言語哲学と歴史哲学との関係については「翻訳者の課題」を中心的なテキストとし、その読解のためにとりわけライプニッツ哲学との関係を重視した。この関連ではさらに20世紀におけるライプニッツ受容にも研究対象を拡げた。

(2)同時代の哲学との関係では、とりわけエルンスト・ブロッホの哲学との関連を重視し、ブロッホのイメージの思考と歴史哲学との関連を中心に研究を行った。ベンヤミンの歴史哲学の中心概念となる「弁証法的イメージ」を理解の基盤とするためである。さらにブロッホやベンヤミンのイメージ論が前提とする19世紀末から20世紀初頭のイメージ論・ファンタジー論の文献読解も行った。

(3)歴史哲学的な思考と終末論的思考との関連を重視し、ヤーコブ・タウベス『西洋の終末論』(1947)を基礎文献としながら、ベンヤミンとフランツ・オーファーベックとの関係を、死後に編纂、出版された『キリスト教と文化』(1919)において展開された「原歴史 Urgeschichte」の概念のベンヤミンによる受容を中心にして考察した。

#### 4. 研究成果

冒頭で述べたように、歴史哲学は近代における根本的な自己理解の形式である。この洞察そのものが、実はこの研究成果のひとつをもっとも一般的に表現したものにほかならない。「人間とは何か」という問いは、カント以来、近代哲学を規定するものとなったが、この問いの遂行は20世紀初頭においては歴史哲学のもとに行われたとすることができる。この哲学は、未確定な未来にもっとも晒らされていた時代に営まれたからである。

研究計画を実施する途上で獲得されたこの認識は、ベンヤミンのテキスト読解を秘かに導くものとなった。

(1)「翻訳者の課題」(1921)は、初期に展開された言語哲学的思考と後期に展開されることになる歴史哲学を架橋する発想をもつ論文とみなすことができる。したがって、言語哲学と歴史哲学との連関を探ることに読解の重点が置かれた。

ベンヤミンは、上述の自己理解というものを、言語の自己理解というかたちで捉え直す。というのも、ベンヤミンにとって自己理解は言語表現と切り離せないからである。興味深いのは、言語の自己理解というものが翻訳を通してしか行われないとベンヤミンが考えていることである。つまり、異なる言語との対決が自らの言語のあり方を測るのだ。そして、その対決の可能性の条件となるのが「歴史」にほかならない。

この歴史は、出来事の時系列における継起としての歴史ではなく、あくまでこの対決においてのみ表現される歴史、すなわち「メシア的な終わり」を目指す歴史である。したがって、私たちがそのうちに生きている歴史ではなく、あくまで翻訳のうちで表現されるものがベンヤミンにとっての歴史なのであり、ベンヤミンのメシアニズムはこの水準で理解されねばならない。

もちろん、この表現の概念は、ライプニッツの表現の概念に基づいて解釈される必要がある。ベンヤミンは「翻訳者の課題」においてライプニッツには言及していないものの、明らかにその参照を読み取ることができるからである。ライプニッツにおいてモナドの内的状態が表象において表現されるように、ある言語の歴史における現在における状態は翻訳において表現されるのである。

では、この翻訳によって表現される歴史とはいったいどのように理解されるべきであり、そのメシアニズムとの関連はいかなるも

のなのか。なぜ表現概念と歴史、表現概念とメシアニズムが結び付けられるのか、この問いが次なる課題となった。

(2)エルンスト・ブロッホのイメージ論の研究、ならびにそれに関連する19世紀・20世紀末のイメージ・ファンタジー論研究は、この時代にイメージの問題が浮上した理由のひとつが、19世紀後半からの科学主義ないし唯物論の興隆、文化人類学的による自然民族の慣習や神話についての知識の蓄積、比較言語学・比較神話学の発展に存することをまず確認することとなった。いずれにおいても、想像力というものが文化形成にとって根本的な役割を担っており、想像力の解明のためには心を伝統的な哲学的心理学から解き放ち、あらためて問い直すという動機がそこには存在する。もちろん、写真や映画が日常生活に文字通りのイメージを氾濫させることになったことは、その間接的な理由のひとつでもある。

イメージ体験というものが人間にとってもっとも原初的な体験であるならば、そこには人間が体験しうるすべてがあらかじめそこに内包されているはずだというヘーゲル的な発想からブロッホは、神話的イメージを解釈する。

ここで神話的イメージとは、人間にとって必要不可欠なイメージ、ユングの言葉を用いて言えば元型的なイメージ、すなわち母のイメージ、父のイメージ、子どものイメージなどのほか、神話において表象されているユートピア、地獄、世界終焉などのイメージを指す。

根源的なイメージ体験が、神話と共通する層をもつこと、この点でブロッホはクラークスやユングと一致する。しかし、ブロッホはイメージを原初のイメージに還元するのではなく、そこにおいてまだ生きられておらず、実現されていない内容があると主張する。それがイメージにおける未来であり、希望である。ブロッホはイメージ経験を生成する歴史的過程のなかで捉え、来るべきものの指標とみなす。いわばイメージにおける未来を読み取ることは、私たちの過ぎ去った太古と来るべき未来を媒介する現在がいかなる時なのかを知ることなのである。

ベンヤミンは「弁証法的イメージ」の概念によって、ブロッホと同じように、イメージを神話的イメージといまだ生きられていない願望のイメージの総合として捉える。ブロッホのイメージについての思考とベンヤミンとのそれがここまで酷似していること

を認識することができたのは、この研究の大きな成果のひとつである。したがって、ブロッホとの相同性と差異性を精密に取り取り、そこにベンヤミンの歴史哲学的思考においてイメージがどのような役割を演じることを明らかにすることが次なる課題となった。

(3) ヤーコブ・タウベスの『西洋の終末論』によれば、終末論の近代的形態は革命の理論である。革命の理論とは、歴史的断絶の経験の可能性を理論的に構成することにほかならない。歴史的断絶は、もっとも極端なかたちにおいては、この世界を別の世界によって置換されることによって生じるが、この根拠づけがいわば上述の理論的構成を意味する。この思想は黙示思想、グノーシス思想、初期キリスト教の思想に共通するものである。

『西洋の終末論』においては言及されていないが、オーファーベックは、この断絶を歴史の理論として内在的に理解しようとしていると考えることができる。

「原歴史」とはその後の歴史や伝統を可能にしなが、制約するものであるにもかかわらず、その後の歴史からは原理的に接近できない起源ないし発生史を意味する。オーファーベックは原歴史の概念をまさに初期キリスト教の研究をとおして着想していた。具体的に想定されていた原歴史は原始キリスト教の歴史なのである。

オーファーベックは原歴史と歴史との関係を比喩的に死によって断絶を穿たれる関係としているが、この関係の理解は、「翻訳者の課題」における生と「死後の生」の概念に酷似している。この認識をもってあらためて「翻訳者の課題」における「歴史」の概念を読み直すことも新たな課題となった。

「原歴史」の概念が、術語として用いられるのは『パサーージュ論』(第一期作業時期 1928 1929 年、第二期作業時期 1934 1940 年)においてである。「19 世紀の原歴史」ないし「近代の原歴史」をベンヤミンはイメージ経験を通して掘り起こそうとした。

弁証法的イメージの概念は、初期の資本主義文化の経験の基層を析出するためのいわば装置であり、原歴史を想起することによって、原歴史とその後の歴史を穿つ断絶を克服することによって、新たな時代の可能性、すなわち新たな断絶 = 革命の可能性を指示するようなイメージであった。

原歴史の認識はその後の歴史の過程の必然性を認識することであり、そのことをベン

ヤミンは弁証法的イメージの概念のうちに読み取ろうとした。この必然性の認識はベンヤミンにとって認識者を「覚醒」へと導くものであり、この覚醒においてこそ時代の断絶が経験されることになる。まさにこの認識と覚醒こそがベンヤミンにとっての自己理解の表現の媒体にほかならない。

この主題においてはさらに精密にオーファーベックの原歴史の概念をベンヤミンがいかに受容したのかについての検討が行わなければならない。そのときゲーテの原現象の受容もあわせて考慮されることで、ベンヤミンが時代に先行し、時代を制約するもの、いわば「原歴史 Urgeschichte」ならびに「原現象 Urphänomen」の接頭辞 ur- の論理をいかに理解していたのかをより正確に理解できることになるだろう。

以上、三つの主題を通して明らかにされたのは、ベンヤミンは自己理解をやはり自ら独特の歴史概念のうちに位置づけていたことであり、理解の遂行を翻訳ないしイメージの読解という行為と結びつけていたことである。残る問いは、なぜ読むという行為が自己理解の遂行として理解されるのかであり、そのときベンヤミンにおける歴史の概念が正確にいか理解されるかである。以上の問いは、本成果を引き継ぐ今後の研究において明らかにすることを試みたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

森田團、純粹言語への志向 ベンヤミン「翻訳者の課題」における言語の概念、『九州大学哲学論文集』、査読無、第51号、2015、41-59頁

森田團、スフィンクスの解読 ポール・ド・マンにおける「読むこと」と「歴史」、『思想』、査読無、第7号、2013年、128-149頁

[学会発表](計9件)

森田團、仮象と表現なきもの ベンヤミン「ゲーテの『親和力』」における美の概念、第38回日本現象学会シンポジウム「仮象の現象学」、2016年11月26日、高千穂大学。

森田團、Vanitas 静物画の時間性、シンポジウム「絵を見る、絵を読む 小林康夫先生『絵画の冒険』をめぐって」、2016年10

月 23 日、西南学院大学。

\_\_\_\_Dan Morita, „Liebe, Schicksal und Hoffnung in „Goethes Wahlverwandtschaften“. Benjamins Interpretation von Otilies Leben.“ Dipartimento di LINGUE E LETTERATURE STRANIERE, 2016 年 4 月 28 日、Università di Verona. (ヴェローナ大学、マッシモ・サルガーノ教授による招聘講演)

\_\_\_\_森田團、Dramaturgia ベンヤミンの『ハムレット』論、「COLLOQVIVM IN HONOREM PROF. YASVNARI TAKADÆ 「MOMENTVM CRITICVM あるいは さよならの向う側」」、2015 年 3 月 21 日、東京大学・駒場。

\_\_\_\_森田團、ヴァルター・ベンヤミンの初期言語哲学における言語・存在・歴史、九州大学哲学会 シンポジウム「言語・共同性・歴史 和辻哲郎とベンヤミンの哲学から出発して」、2014 年 9 月 27 日、九州大学。

\_\_\_\_森田團、“Keiji Nishitani’s Philosophy and the Problem of Nihilism” 第 4 回 日中哲学フォーラム「日中の哲学者がともに考える 哲学の原理的あり方と現代社会における役割」、2014 年 9 月 20 日、北京外国語大学。

\_\_\_\_森田團、喜劇と歴史 ヴァルター・ベンヤミン「運命と性格」再読、シンポジウム「ジョルジョ・アガンベンと哲学の潜勢力 岡田温司先生を迎えて、2014 年 6 月 21 日、西南学院大学。

\_\_\_\_森田團、諸言語の生と志向性 ヴァルター・ベンヤミン「翻訳者の使命」における歴史の概念、第二回 国際文化学会、2014 年 3 月 23 日、西南学院大学。

\_\_\_\_Dan Morita, “Japanese Philosophy as “Pseudomorphosis,” The Case of Keiji Nishitani’s “Nihilism”: the Problem of the Philosophy of History and the Notion of Sin.” 23rd World Congress of Philosophy, 2013 年 8 月 5 日、The University of Athens.

〔図書〕(計 2 件)

\_\_\_\_森田團、エルンスト・ブロッホ『この時代の遺産』における陶酔の弁証法、『陶酔とテクノロジーの美学 ドイツ文化の諸相 1900-1933』(鍛治哲郎・竹峰義和編) 青弓社、2014 年、109-136 頁

\_\_\_\_森田團、手紙を通して紡がれた思考 文献学・神話・哲学をめぐる、『ベンヤミン / アドルノ往復書簡』、下巻、みすず書房、2013 年、252-267 頁

〔書評〕(計 1 件)

\_\_\_\_森田團、柿木伸之『ベンヤミンの言語哲学 翻訳としての言語、想起からの歴史』(平凡社) 書評、『週間読書人』、2014 年 12 月 5 日号。

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

森田 團 (MORITA, Dan)  
西南学院大学・国際文化学部国際文化学科・准教授  
研究者番号：40554449

(2) 研究分担者

該当者なし

(3) 研究連繫者

該当者なし